

アンテナとその周囲に数本の温度センサーを設置し、アンテナから1cm離れた部位の温度が約42℃以上になるように4～9回加温した。悪性グリオーマの2例では4本のアンテナを2cm間隔で正方形に刺入し、RF容量型加温も試みた。その結果、RF interstitial hyperthermiaは正常脳に対する影響が少なく、高齢者にも適応でき、悪性脳腫瘍の有用な治療手段になりうるものと考えられた。

### 13) 悪性グリオーマに対する LAK 療法

小野 晃嗣・田中 隆一 (新潟大学脳研究所)  
吉田 誠一・森 宏 (脳神経外科)

再発悪性グリオーマに対し我々が行ってきた局所 LAK 療法を紹介し、これまでの臨床成績からその有用性に関して検討した。

対象と方法：1985年より局所 LAK 療法を行った35例のうち、再発大脳悪性グリオーマの24例を分析した。LAK 細胞は自己リンパ球から誘導し、約2カ月は週2～3回直接腫瘍に注入して、その後は月1～2回程度で継続した。治療効果は、画像、症状及び historical control との比較による再発後の生存期間で判定した。

結果：24例のうち病巣の縮小は5例(奏効率20.8%)、臨床症状の改善は9例(37.5%)で得られ、また4例では再増大のない寛解状態が治療後15, 17, 36, 56カ月続いていた。再発後の平均生存期間は22.9カ月で、対照群に比し有意に延長していた。副作用として、痙攣、発熱、脳浮腫などが認められたが、いずれも一過性であった。

結語：再発悪性グリオーマであっても、LAK 療法により長期生存する症例もあり、適応及び開始時期によってはより有用な治療となり得ると考えられた。

### 14) 内科側からみた甲状腺癌の診断手順

筒井 一哉・佐藤 幸示 (県立がんセンター)  
新潟病院内科  
鈴木 正武・角田 弘 (同 病理)  
三浦 恵子・新妻 伸二 (同 放射線科)  
佐野 宗明・赤井 貞彦 (同 外科)  
富樫 孝一 (同 耳鼻科)

甲状腺癌の検査手順を検討するため、最近2年の手術例(悪性69例、良性74例)の術前診断率を各診断法別にみた。

診断能で正診率の一番高いのは穿刺吸引細胞診(ABC)の83.3%で、特異性も97.1%と優れていた。感度が一番高いのはシンチグラムの82.0%であった。ABCの

組織型別診断能では、未分化癌、悪性リンパ腫の感度は100%で、乳頭癌も74.4%と良かった。一方、乳頭癌濾胞混合型と濾胞癌は、いずれも20%と低率であった。シンチは、ABCの無効な乳頭癌濾胞癌、濾胞癌の感度は83.3%、60.0%と良好であった。しかし、特異性に乏しく、濾胞癌と異型度のつよい腺腫との鑑別は不可能であった。濾胞癌の診断の決め手である被膜浸潤はMRが有効であった。

以上より、触診、ABCで未分化癌、悪性リンパ種が診断可能で、乳頭癌はエコー、軟線撮影の追加で、ほぼ可能であった。濾胞癌の診断は難しく、腺腫との鑑別のため、シンチによるふるい分けとMRが必要である。

### 15) 大理石病様骨転移を示した胃癌の1例

塚田 裕子・佐藤 幸示 (県立がんセンター)  
筒井 一哉 (新潟病院内科)  
堀田 利雄・平田 泰治 (同 整形外科)  
角田 弘 (同 病理)

55歳の男性が高ALP血症を契機として受診、レントゲン上で全身の骨硬化像を認め、骨生検で低分化腺癌の骨形成性骨転移と診断され、剖検で胃体中部のⅡc様進行胃癌の転移と判明した。骨性ALPの著明な上昇、Tc-99m methylene diphosphonate 骨シンチグラムでのびまん性異常集積より骨新生の亢進が示唆され、また尿中Ca排泄量が著明に減少、副甲状腺ホルモンが上昇し、造骨への血清Ca動員による二次性副甲状腺機能亢進状態が推測された。本邦で、最近10年間に報告された、胃癌によるびまん性骨形成性骨転移8例について検討し、また造骨性転移の機序に関しても若干の文献的考察を加えた。

### 16) 肺小細胞癌 ED 症例に対する CAV (CDDP + ADM + Ethoposide) + G-CSF による dose intensive chemotherapy の pilot study

山本 尚・横山 晶 (県立がんセンター)  
木滑 孝一・栗田 雄三 (新潟病院内科)

肺小細胞癌 ED 症例に対して CDDP, ADM, Etoposide に G-CSF を併用した Dose intensive chemotherapy の Pilot study を報告した。

現在までに7例が登録され、全例が適格例であった。

方法は CDDP 80 mg/m<sup>2</sup>, ADM 30 mg/m<sup>2</sup> を day 1, Etoposide 60 mg/m<sup>2</sup> を day1-5 に静注し、G-CSF 2 μg/kg を day 2 より皮下注す。以上を、3週間隔で5